
綺麗な恋

夢優うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綺麗な恋

【著者名】

NO453P

夢優'つわお

【あらすじ】

卒業まであと半年。彼の傍にいられる時間はもう、こんなにも少ない。

(前書き)

初投稿です。
感想など、お待ちしておりますが、多少の粗相は大目に見てやって
ください！
よろしくお願ひします。

見ているだけでいいんです。

傍に居られるだけで、私は幸せです。

初めて会ったとき、あなたが言つてくれた言葉。

それは、なかなかクラスに馴染めなかつた私にとって、とても嬉しいものでした。

だから……これで十分なんです。これ以上は望みません。

どうか、この恋を、綺麗なままで終わらせてください。

* * *

3年生の秋。卒業までは、残り半年を切つてしまつています。
冬に入りかけた秋の風は、昨日より冷たくて、思わず身を震わせ
ました。

「大丈夫か？」

声につられて横を仰ぎ見ると、彼が心配そうに私を見ています。心配をさせてしまったことを、申し訳なく思いつつも、その言葉に身体がぽかぽかしてくるのを、確かに感じました。

「はい、大丈夫です」

秋の終わりに差し掛かる、放課後の廊下。今、私は彼に手伝つて貰つて、プリントを運んでいます。

別段、委員長などではないのですが、私がもたもたと帰り支度をしていたために、教師の目に止まつてしまつたようなのです。彼には、本当に申し訳なく思います。

「あの……私を気にせずとも、先に帰つて構いませんが……」

本当は彼も含め、4人ほどで帰る予定でしたが、他の2人は早く帰らねばならぬようなので、先に帰つてもらいました。

今からならまだ追いつきうるので、言つてみたのですが、彼は渋い顔になります。

「一人だけおいて行けるわけないだろ。それに、こんな重いのを一人で持たせるのは危ない」

「ですが……何か、急いでませんか？」

心なしか、彼は急いでいるように感じます。歩調も私に合わせてはくれていますが、最初よりも少し速いです。やはり、迷惑だったのでしょうか。

「そんな顔するなって。別にこのくらい、大したことじゃない。ま

あ、急いでるっちゃんあ急いでいるが……」「

その言葉を聞いて彼を見ると、ちよつと目が合いました。

その瞳が心配そうな色をはらんでいて、目が離せなくなります。

「……寒いんだろ？」のままだと風邪引きしきだし、早く済ませてあつたまろ？」「

そう言われて、一瞬理解出来ませんでした。

徐々に理解していくにつれ、頬に熱があがるのが自分でもわかります。

ああ、本当にあなたは

「……ありがとうございます」

とても、優しいですね。

顔に集まつてくる熱を悟られなによつて、私は顔を反らしました。

* * *

教務室にプリントを届けて、その他にも言われたことを全て終わらせると、思ったより多くの時間が経過していました。

それでも、日が落ちる前に帰してくれたことは、素直に嬉しく

感じます。

教室に荷物を取りに行って、再び廊下にでたとき、冷たい風が体に吹き抜けました。

思わず身を震わせます。

見ると、どうやら窓が開いているようです。

誰が締め忘れたのか疑問に思いつつも、窓に近づいたのですが……

「…………え？」

ふわり、と首もとに暖かなものを感じました。

それは、触れてみると、ほんのり熱を持つていて。

マフラー？

その人肌のぬくもりは、今まで使用していた物だと、容易に想像出来ました。

振り返って見ると、やはり彼がしていたマフラーがありません。

……何故なのでしょう。

「まひ、帰るぞ」

差し出された手を取ると、やはり彼の手は温かかったのです。窓は、いつのまにか閉まつていました。

「あの……」
「あれ」

首に巻かれたマフラーを差しながら尋ねれば、どこか拗ねたような声が答えました。

「だつてお前、寒そうにしているのに、何も持ってきてないじゃな
いか」

「…………すみません」

「いひつて。…………返すのは明日でいいから、風邪ひくなよ」

やつ言つたきり、彼は黙つてしましました。

けれど、落ちる沈黙は決して不快なものではありませんでした。

彼は、いつも、誰にでも優しいのです。

臆病な私には、それがとても好ましく見え、同時にどこか不思議
に感じるのです。

私には、彼のように振る舞つことできません。だから、余計に。
びつてあなたは、そんなにも優しくなれるのでしょうか。
そう思いながら、私は何も言えませんでした。

綺麗な綺麗な、恋がしたかつた。

物語のように、綺麗な恋が。

でも、そんなもの、できるはずがないとわかつたから。

だから私は、いつのまにか恋愛に無頓着になつていきました。

3年生の、クラス替え。

友達の少ない私は、新しいクラスに友達がいなくて、困っていました。

誰かに声をかけたくて、それでも勇気が出せなくて。

そんなとき、あなたは声をかけてくれました。

「友達にならう」と、言つてくれました。

それが、私はとても嬉しかったのです。

こつ、どいでやつたのかは分かりません。

気付いた時には、私は彼を好きになっていました。

だけど、現実は、単純ではないんです。

物語のようになり、回想になれることは、ほんの一握り。

恋に恋するように、気まぐれで叶えたいことも少なくないことがあります。

それになにより、彼に醜い感情を見せたくないから。

それならうまい、いつも。

この恋を、綺麗なまま終わらせてましょ。

「あと、半年ですね」

冬に入りかけたこの季節。卒業まで、あなたと過ごせるのは、あと半年。

「……そうだな」

実際には半年よりも少ない期間は、長じようで、やはり短いです。

「 約束、して欲しいんです」

「ん？」

唐突に言い出した私に、彼は不思議そうに首をかしげました。

「めんなさい。だけど約束をお願いを、きいてくれませんか。

怪訝な顔を浮かべるあなたに、一つだけ。

「せめて……最後まで、友達でいいですか？」

4月のあの日から始まつた関係。

短い関係は、彼の他の友達を押し遣つてまで、仲良くしていいのか、たまに不安になるのです。

おそるおそる聞いた声は、微かに震えてしましました。

もし、否定されたらと思うと、怖くて。

「あたりまえだろ」

夕日で赤く染まつた顔が、笑顔になつて当然のように言つてくれ

るのが、嬉しいです。

「あつがとうござります」

今日で何度もお礼を言いながら、私も出来る限りの笑顔をつくりました。

ただ、見ているだけで。

ただ、傍に居られるだけで。

それだけで、私は満足です。

だから

残された時間。

最後まで、あなたを想い続けていいですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0453p/>

綺麗な恋

2010年12月29日18時34分発行